1955年火野葦平「撫順戦犯管理所」の視察とその認識
――火野葦平所蔵写真、未公開日記をふまえて

増　田　周　子

Inspection and recognition of Ashihei Hino's "Fushun War Criminal Control Office" in 1955
――based on Ashihei Hino's photographs and unpublished diary

MASUDA Chikako

This paper describes Hino's visit to New China from April 21, 1955 and what Hino thought when he saw the war criminals. In particular, it focuses on the inspection of the Fushun Prison War Crimes Control Office, which was visited on May 15.

In 1955, about 1,000 Japanese war criminals were imprisoned at the Fushun Prison War Crimes Control Office. China ratified it in 1956, but was in compliance with the 1948 Geneva Convention on the Treatment of POWs. Therefore, forced labor was not imposed on war criminals, and they responded generously without violating physical human rights violations such as abuse. However, Hino does not fully support the Chinese government's policy of improving the idea of war criminals at the Fushun Prison War Crimes Control Office.

Ten years after the war, we can see the depth of the scars of the war in the appearance of war criminals who cannot return to their homeland of Japan.

In this paper, we will consider this inspection and recognition using photographs taken by Hino and surrounding people, and digital materials from the unpublished autograph diary "New China Travel Diary II" (Kitakyushu Literature Museum collection).

キーワード：火野葦平、火野葦平自筆日記、火野葦平撮影写真、撫順戦犯管理所

はじめに

火野葦平は、1955 年 4 月 6 日から 10 日にかけて、インドのデリーで開催された「アジア諸国会議」に日本の文化問題代表として参加した。「アジア諸国会議」終了後、会議に参加した日本代表団の一部の 28 名は、1949 年 10 月 1 日に成立した中華人民共和国、すなわち新中国を視察することになる。火野も 28 名の一人として新中国の視察に参加した。火野らはカルカッタ、ラングーン、バンコク経由で香港に入り、1955 年 4 月 20 日に汽車で深圳から新中国に入国した。そして、21 日より広東から新中国を視察していく。火野の新中国訪問については、拙稿にて 5 月 3 日までを記した。[1)]

本発表では、これまで記した新中国訪問記の続きのうち、瀋陽、撫順プリズンの戦犯管理所を中心に報告する。本論では、火野の撮影した写真や、見聞記『赤い国の旅人』、火野の自筆日記『新中国旅日記Ⅱ』などを用いる。火野が、新中国をどのようにとらえ、そして、戦争を振り返ったのか。火野の見解について考察していく。なお、使用した火野の自筆日記『新中国旅日記Ⅱ』は一部であるが、本稿で初めて公開するものである。

1. 火野の中国視察の工程――瀋陽から撫順に至るまで

火野ら 28 名は、1955 年 4 月 20 日に汽車で深圳から新中国に入国した。そして、21 日より広東から新中国を視察していく。4 月 26 日までは、広東、漢口、武昌、武漢、そして北京を訪問していった。特に、4 月 28 日から 5 月 10 日までの北京視察は意義深いもので、ちょうど慶祝五一国慶節の行事の視察も出来、賑やかな中国を味わった。建設ラッシュ、蠅撲滅運動など、新中国が発展していく一方で、胡風弾圧などの最中でもあり、火野らは、新中国の良い面と、マイナス面の両極を感じる。ただ、新中国は「見物したいところ、話を聞きたいこと、調べたいこと、会いたい人、なんでも遠慮なく。そして、意見を聞かせて下さい。われわれの新中国はまだ発足したばかり、欠点がたくさんあります。美点をほめていただくのも結構ですが、欠点を指摘していただくことをいっそう歓迎いたします。（後略）」[2)] と通訳の案内人に言わせるなど、広く開かれ、外国人の意見を、率直に聞こうとしていた。そして、5 月 11 日、北京を出発し、12 日の午前 10 時 7 分に、瀋陽に着く。遼寧賓館に宿泊するために向かい、午後には東北工業展覧会そして、市内見物を行い、夜招宴された。13 日は、鞍山製鋼所を視察した。こうして、14 日、午前、瀋陽市鉄西区工人村、完全小学校視察。午後、瀋建台区大青村農業

1）「一九五五年　火野葦平『アジア諸国会議』参加後―インドから香港、広東へ―」（関西大学『文学論集』2015 年 3 月）、「火野葦平の新中国視察記―広東から、漢口へ」（関西大学『東西学術研究所紀要』2016 年 5 月）「一九五五年火野葦平の新中国視察記　漢口から武昌、武漢へ」（関西大学『文学論集』2021 年 3 月）、「一九五五年　火野葦平の北京視察―その認識と見解―」（関西大学『文学論集』2021 年 12 月）。

2）『赤い国の旅人』（1955 年 12 月、朝日新聞社）197 ～ 8 頁

生産合作社、瀋陽第一機床廠見学。夜、遼寧人民芸術劇院で、民族芸能大会見物をする。15 日、撫順炭鉱、原油工場を訪れる。撫順日本人戦犯管理所、撫順市養老院を視察。16 日、自由行動、市内見物。17 日、午前 4 時 7 分、瀋陽発。

以上のように、火野ら 28 名は、5 月 12 日から 17 日まで、瀋陽、撫順に滞在し、視察を行った。

2. 撫順戦犯管理所

前章で記したように、火野ら一行の 28 名は、5 月 12 日から 17 日まで、瀋陽、撫順に滞在し、工場、小学校などを見学した。その中で特に重要なのが撫順戦犯管理所の視察であった。本稿では、この撫順戦犯管理所について詳しく説明していきたい。

まずは、撫順戦犯管理所について、その概要を記す。撫順戦犯管理所とは、遼寧省撫順市順城区にあった中華人民共和国による戦犯管理所（捕虜収容所）である。1936 年、満州国が建設した撫順監獄跡に設置された。1950 年 7 月ハバロフスク捕虜収容所に監禁されていた日本人捕虜 969 名が移管された。[3] 安藤裕子によると、

> 敗戦後、シベリアには数多くの日本人捕虜が抑留され強制労働に従事していたが、その多くが引き揚げる中、中国に移管された 969 名の捕虜がいた。彼らがどのように選抜されたのか明らかになってはいないが、軍人と「満州国」の官僚・憲兵・特務・警察・鉄道警護軍等が含まれており、階層も多岐に渡った。シベリアからの捕虜移管は、中ソ友好条約締結に際してスターリンが毛沢東に提案したとされる。その狙いは、国際社会で中国共産党の認知と評価を高めることであり、毛沢東も賛意を表明した。日本人戦犯政策の総指揮をとったのは周恩来であり、政策は公安部の下で進められた。周恩来は明治大学への留学経験もある知日派であり、戦時中から国民党や日本人の捕虜の取扱いにも熟知していた。[4]

この日本人捕虜 969 名に加え、太原戦犯管理所から 9 人、国内から受理した 4 人の合計 982 人の日本人戦犯が撫順戦犯管理所に監禁された。[5] 1950 年 7 月、撫順戦犯管理所と改称する。当時収監された日本人達は、以下のように認識していたという。

> シベリアから移管された捕虜のほとんどは、自分たちが「戦犯」になったことを知って反感を抱いた。彼らにとって「戦犯」とはもっと偉い人たちであり、自分たちは上層部の命令に従うより他なかったという認識であった。彼らは世界各地で BC 級戦犯が裁かれてい

3）彭厚訓編、撫順戦犯管理所編『日本戦犯再生の地』（2005 年 7 月、五州伝播出版社）
4）安藤裕子「和解の記憶の欠落―戦後日本における「認罪」の表象―」『アジア太平洋討究』No. 25、2015 年
5）3 に同じ

ることを知らなかったのである。[6)]

日本人たちの認識は、あくまで、捕虜であるとの立場であり、何故「戦犯」なのかと疑問を抱いていた。ということで、かなり反抗的な収容者はいたようだ。

> しかし、反抗的な戦犯に対し管理所職員は手厚い対応を行った。米やスープ、野菜や魚までついた十分な食事を与え、強制労働もなかった。戦犯は1日の大半を学習や運動をして過ごし、週1回の入浴、月1回の散髪も認められ、病気になれば手当も受けられた。職員は戦犯の人格を尊重するよう厳しく指導されており、侮辱、虐待を行うこともなかった。これらは「改造」という中国独自の戦犯政策の流れを組むものであり、「正しい考え方・思想を正しい方法で教育すれば、人間は変わる」という毛沢東思想に基づくものであった。[7)]

このように、ソ連のシベリア抑留は捕虜としてであったが、「戦犯」として扱いながらも、撫順戦犯管理所は、かなり日本人収容者を手厚く扱っていたのである。その後、裁判なども開かれ、起訴された者もあるが、被告全員が罪を認め謝罪したこともあり、結局、1956年から1964年3月までの間に日本人戦犯は全員帰国することとなったのである。[8)]

さて、日本は1952年4月28日に発布された、サンフランシスコ平和条約により戦後ようやく、占領軍から解放され主権を取り戻した。そのころから、「戦犯」の解放が国民運動となり、衆議院海外同胞引揚及び遺家族援護に関する調査特別委員会委員長山下春江を中心として議案提案し、昭和28年8月3日に「戦争犯罪による受刑者の赦免に関する決議」が衆議院本会議に上程され、全会一致で可決されることとなるなど、「戦犯」解放の動きが活発になっていた。こうした中で、火野ら今回の一行が参加した「アジア諸国会議」でも、海外に収監されている日本人「戦犯」の早期解放の提案がなされていた。このような時期に、火野ら一行二十八名は「中国政府の特別のはからいで」、[9)] 撫順戦犯管理所の日本人戦犯と面会することが認められたのであった。

3. 火野ら一行の撫順戦犯管理所視察

まず、撫順戦犯管理所に到着すると、十数名の係員が迎えに来ていた。火野の自筆『新中国旅日記Ⅱ』には「◎日本人戦犯管理処。高い灰色レンガ塀、そのうへの電流有刺鉄線、四角の監視塔に監視兵。入つて行くのに足が速い。センパンといふ言葉は胸をえぐる。きこえて来る

6）4に同じ
7）4に同じ
8）3に同じ
9）火野葦平『赤い国の旅人』301頁

ときめき」と書かれてある。集会所になっているクラブに案内された。「クラブに入る。ずらりとならんでゐる工作員、女工作員もゐる」（『新中国旅日記Ⅱ』）。一人一人に案内者をつけてくれた。そのクラブからは「しきりに、どよめきの声、喊声、拍手、歌声、楽隊の音などが聞えて来た」。[10] 所長から次のような説明があった。

○ 所長孫兆佐さんの話。―学習自由。食事は工作員と同様、医務室、フジタヨシヲは足結核をわずらつたので病院におくつた。視力がわるい者には眼鏡、歯のわるい者は歯の治療をする。1. 参観時間、約２時間とする。2. 参観範囲は医務室、炊事室、浴室、風呂場等。3. 日曜なので、バスケツトとバレーの試合をしてゐる。4. 規則―㋑秩序を保つこと　㋺直接手紙や品物をわたさぬこと　㋩戦犯と自由に談話しないこと、特に氏名提出して行ふこと　㋥一人づつの案内者をつける。―写真は工作員をうつさないやうに。」（『新中国旅日記Ⅱ』）

時間は二時間内で、後で面会の時間をおくから、自由に戦犯と談話しないように、工作員の写真は許可しないなどの注意を受ける。その後、火野ら一行は所内の見学をはじめた。火野についてくれたのは、「二十歳ぐらいかと思われる若い兵隊」[11] であった。一行は、炊事室、消毒室、理髪室、浴室などを廻り、宿舎を見た。宿舎については、「宿舎―八人、十人、四人、六人などいろいろ。白いベツドとふとん。クルクル巻いてあるものもある。」（『新中国旅日記Ⅱ』）と記してあった。火野の撮影した、浴室、理髪館、宿舎の写真は以下の通りである。

10）『赤い国の旅人』301 頁
11）『赤い国の旅人』301～302 頁

戦犯者は、全部運動場にいるので、視察中、どの部屋も空っぽだった。火野は次のように述べる。

> 私はこの撫順プリズンの装飾のない白い部屋に立って、眼と心とにしみとおって来るものをおぼえた。中国の要人の口から、近く戦犯問題は解決されるはすだと聞かされたので、私は一日も早くその日が来ることを祈っているが、それにしても終戦後すでに十年が経過しているのである。[12)]

戦後問題が、終戦後10年以上もたっても平和的に解決されていないことは気がかりであった。この撫順戦犯管理所は、「建物から建物へ移る庭のいたるところに花壇があり、そこには色の

12）『赤い国の旅人』302頁

ついた石ころを組みあわせて、ハトの絵や、平和の文字がかかれてあった」。[13] 医務室には、「薬局、注射室、手術室、外科、内科等設備がととのい、病室には病人がいた」。[14] また、火野の自筆『新中国旅日記Ⅱ』には、「○病室―看護婦　病人の身体をふいてゐる。ジツトこちらをにらんだ年配病人。（歌声）病室の窓ガラスにはめてある鉄格子」とある。火野らは、戦犯が全部集まっている運動会場にやって来た。最初に聞いたどよめき、拍手、喊声、楽隊の音は、ここからの音だった。「高い塀にかこまれた内側のグラウンドはそうひろくなく、二つのバレー・ボール・コートがあって、どちらも試合の真最中である。地面に座ってならんだ大勢の戦犯たちはしきりに声援をし、応援団長か赤、桃、緑の旗をうちふっている」。[15] 火野の自筆『新中国旅日記Ⅱ』には、

○ 運動会―
○ バレーボール、運動場で二組―4―49人
○ 体育部と文化部　前者手前、コバルトパンツ、白ランニング、黒ヅツク、黒帽、文化部　エビ系パンツ、黒ランニング　みんないい身体してゐる。
○ 見物、ずらりとならんで熱狂、黒ズボン、黒帽、白シヤツ、旗ふり、拍手して熱狂、旗赤、緑、桃色。しきりにふる。フレーフレーの声。　（『新中国旅日記Ⅱ』）

とある。戦犯者の服装は、全て、白いシャツに黒いズボン、黒い靴のようである。この運動会では、二組のグループに分かれて、バレーボールの試合をしていた。また、「大運動会」プログラム」が以下のように張り出されていたが、火野は「遠くてよく読めない」[16] と述べている。

1. 合同行進　2. 開会の辞　3. 連合体操　4. 100米競走　5. 低ハードルリレー　6. スプーンレース　7. 鯉の滝上り　8. 人探し　9. 混合リレー　10. 変装競走　11. 1500米競走　12. 玉入れ　13. 800米リレー　14. ―　（『新中国旅日記Ⅱ』）

また、ここには、文化部、体育部、学習部、生活部の四つの部かあることがわかる。
さらに、火野の『新中国旅日記Ⅱ』には次のような表が掲載されている。

	文化	体育	学習	生活	―	
ウンドウ競技別	10	4	0	10	―	
	15	30	―	―	―	
	10	6	―	50	―	
	17	10	4	10	―	

予定表とプログラム　高い塀にはつてある。

13）『赤い国の旅人』302頁
14）『赤い国の旅人』302頁
15）『赤い国の旅人』303頁
16）『赤い国の旅人』303頁

体育部は、コバルト色のパンツ、白ランニングシャツ、黒ズック、黒帽、文化部はエビ茶パンツ、黒ランニング、黒ズック、むきだしになっている腕や足は健康そうで、動作も活発である。しかし、そんなに上手というわけではなく、妙技による白熱戦が展開されるほどでもない。サーヴなども下手で、相手の方まで行かず、しばしばネットの手前に落ちた。そのたびに戦犯の列からドッと笑い声がおこる。しきりに旗がふられ「フレー、フレー」と声援が送られる。なごやかな風景である。[17]

戦犯の収容所とは思えないほどのなごやかな運動会の様子であった。

○ バレー、笛の音、笑ひ声、サーブが下手で失敗する組
○ 民族独立合同行動隊の歌、合唱（防犯楽隊）
　太鼓、風琴、ついでクラリネツト、ヴァイオリン
○ 平和を守る歌合唱　（『新中国旅日記Ⅱ』）

ときどき、「音楽とともに全員が合唱する。たいこ、アコーデオン、ラッパ、クラリネット、ヴァイオリンなどを揃えた戦犯楽隊は卅人ほどで、合唱されているのは「平和を守る歌」「民族独立行動隊の歌」などであった。歌が終ると、試合がつづけられた」。[18] 火野と映った戦犯楽隊の様子、およびバレーボール風景の写真は次のようである。

17）『赤い国の旅人』303 頁
18）『赤い国の旅人』303～304 頁

ここで、日本側の中国訪問団々長吉岡金市が、戦犯に対して挨拶を行った。吉岡金市氏（1902-1986 年）は、日本の農学者であり、倉敷労働科学研究員を経て金沢大学学長などを歴任した人物である。吉岡は次のように述べた。

○ 吉岡さん挨拶。「このたびアジア会議に出席、中国和平委員会のおまねきをうけてやつと参りました。このたびの会議の目的は、ふたたびアジアで戦争をしてはならないことをアジア中の人々で話し合つたのであります。各団体、各代表が参加した。例がない（団員紹介）。紹介のとき、吉岡さんが「火野葦平さん、麦と兵隊の作家」などといふのでヒヤリとする。中国和平委員会に許しをうけてここに参りました。（オーといふ喚声拍手）。ここへ来て、私たちが戦争中、反戦思想のためつながれた牢獄にくらべてどんなに立派かがわかりうれしくなりました。故国に伝へたいことがあればお伝へいたします。ふたたび戦争をくりかへさないやうに、おたがひに努力しませう。（ウオーツ　喚声　拍手）―胸せまり、涙出る。複雑な感慨。　（『新中国旅日記Ⅱ』）

吉岡によって二十八名が一人一人紹介されたが、火野は「戦争と敗北によってこのプリズンつながれるようになった人たちが、戦争を憎んでいる心の深さは、はかり知れないものがあるにちがいない。そして、その憎悪は戦争とつながりのあるさまざまのものにおよんでいることも想像できる。」[19] として、戦争を描いた『麦と兵隊』の作者と紹介されたとき、「顔が赤らみ、戦犯の人たちをまともに見ることができなかった」[20] という。一方で、戦犯たちを見て、火野は「ここの戦犯たちは、十年の間に思想改造を通して人間改造がおこなわれている様子がはっ

19）『赤い国の旅人』304 頁
20）『赤い国の旅人』305 頁

きりと感じられた」[21] と鋭い指摘をしている。

また、戦犯の代表、学習部のミヤザキ・ヒロムという人物から以下のような答礼があった。

● ミヤザキ・ヒロム氏「一同代表、挨拶いたします。アジア国家会議に参加されたことを心からおよろこび申します。過去、日本の一部の軍閥、財閥の行つた侵略戦争にカリダされてはかり知れない罪業をおかした者であります。（ウオーツ）8千万の国民にはかり知れない責を負つてました。過去をふりかへると胸のはりさける思ひにかられます。（ウオーツ　同感）今ははつらつとして元気であります。小運動会を通じて元気な姿を見て下さい。日本にかへつたならば勇気をもつて、日本の独立と平和のためにたたかつてゐることを伝へて下さい。許されてかへつたならば、手をたづさへて、ゼツタイに侵略戦争に反対するものです。（同感）世界の人たちが幸福になるやう、たたかふものです」（『新中国旅日記Ⅱ』）

上記の「ウオーツ」は、戦犯たちの喊声であった。火野は、「私は胸苦しくなり、あふれ出る涙のため、前方がちらついて、なにも見えなくなった」[22] という。午後四時になっていた。火野ら一行は、最初のクラブに戻った。これから、戦犯との面談が許可され、戦犯名簿が回覧されたが、一冊しかないので、火野にはまわってこなかったから目当ての戦犯を指名することができなかった。名簿がようやく届くと、名簿には次のようにあった。

○ 行政官吏系統　武部六義（偽満国務院総務廳　ソーム長官）警察系統　特務系統　前日軍第59師団　54旅団　39師団、232連隊、63師　117師　憲兵、等（名簿一枚20名づつ43頁　800名位）（『新中国旅日記Ⅱ』）

一行が指名した十数名の戦犯が連れて来られた。戦犯と面談した様子は次のようであった。

話をしているうちに、涙をながす者が多かった。運動会場では誰も元気いっぱいに見えたのに、一人一人を近くで見ると、やはりやつれが目立ち、故国を思う心情の深さや悲しみが、その目や言葉のはしにおおいがたくあらわれていた。誰もが年よりはずっと老けた様子に見うけられた。しかし、なかには面会人の方を鼓舞するように、大きな声で話している者もあった。[23]

火野は会う人がいないので、壁に貼ってある写真を見て歩いた。戦犯は、「作業や労働など

21）『赤い国の旅人』305頁
22）『赤い国の旅人』305頁
23）『赤い国の旅人』307頁

はなにもしていない」[24] という。文化部上演の劇「内灘村」の写真があった。四、五幕もので、戦犯の誰かが創作した劇である。「「内灘は日本人の村だ」「金は一年、土地は万年」「アメ公出て行け」等の文字が書いてあった。クラブ内正面には毛沢東主席の大きな肖像画がかけて」[25] あった。また、火野は戦犯たちのどの人も「思い出はやはり故国にあり、両親や妻子のことをかたるとき、どの人の目にも涙が光っていた」[26] という。

グラウンドの方からは、喊声、拍手、歌声が響いていた。面会時間が切れて、戦犯も一行も退出した。火野は、「私の脳裡にこの人たちの寝る白い部屋のベッドが浮かんで、容易に消えなかった（中略）出て行く私の足はここへ入るときよりもさらに重かった」。[27] と暗澹たる気持ちで所長に礼を述べて、帰途に就いた。

終わりに

本稿では、インドのデリーで開催された「アジア諸国会議」の後に訪れた、火野の新中国の視察の様相と、新中国の認識について、瀋陽、特に撫順プリズンの戦犯管理所を中心として記した。撫順プリズンの戦犯管理所には、約 1000 人程度の日本人が戦犯として収容されていたが、強制労働や虐待をせず、運動会、楽隊、劇などの文化的な活動をするようにうながしていた。ただ、火野の目に映ったのは、戦犯たちの深い悲しみであった。火野は、「中京通信」[28] で、次のように記す。

> この楽しそうな様子の背後にあるものは、やはり恐ろしい人間の地獄であるに相違ない。それぞれに異なった形ではあろうが言葉にも文字にも現わせない複雑なものが戦争の悲劇をものがたっているのである。
>
> 故国へ帰る私たちに、八百二十八通の手紙が委託されたが、なかには、もはや日本に帰る気はない。釈放されたら中国にとどまるといって、手紙を書かないものもあると聞いた。

戦争がもたらした、日本国民達の故国日本への思いは、戦後 10 年たった 1955 年、非常に微妙であったことがわかる。戦争は、人間に深い悲しみと、後悔の念、自責の念しかもたらさないのである。そのことは、作家火野葦平の脳裡にも深く刻まれたと言える。

24）『赤い国の旅人』307 頁
25）『赤い国の旅人』308 頁
26）火野葦平「中共通信　日本人戦犯に逢う」（『西日本新聞』1955 年 6 月 14 日）5 面
27）『赤い国の旅人』308 頁
28）26 に同じ